太平記忠臣藏釋

五

七ツ目　喜内住家の段

〔解題〕　明和三年十月十六日から竹本座上場。作者としては正本に近松半二を始めとして竹本三郎兵衛・三好松洛・竹田文吾・竹田小出雲・筑田平七の名を列ねて居るが半二が主である。赤穗義士の復讐を仕組んだ百篇以上もある戯曲中「假名手本忠臣藏」につぐ名作といはれる。十段續きで、第一鎌倉御所双傷、第二赤穗城中の評定、第三九太夫切腹の段、第四九太夫の妻お禮白河に兵法指南、勘平石切り、第五縫之介浮橋鳥邊山道行（劇中劇の趣向）、揚屋の段、第六四條河原おりゑ惣嫁の段、第七喜内浪宅、第八山科閑居宅兵衛上使、第九問註所天河屋義平拷問、第十討入となつて居る。

「假名手本忠臣藏」のやうに首尾一貫した作ではなくて、義士銘々傳式になつて居り、又判官切腹は八段目で

宅兵衛の平右衛門に語らせたり、討入は義平の夢にしたりするといふやうに趣向を立てゝ居るのは、忠臣蔵の後に出た爲の作者の苦心の結果であらう。本曲では二段目の「蜂の巣」四段目の「石切りの勘平」八段目の「宅兵衛上使」等の各場面も知られて居るが、歴卷はこゝに收めた七段目である。

この場は紀海音の「鬼鹿毛無佐志鎧」（淨瑠璃名作集上卷所收）の第三段目片桐源吾浪宅の場の翻案であるが、非人に姿をやつした重太郎と惣嫁となつて出て居る妻のおりゑとが四條河原で互に顔を見合せて驚く條が第六段の段切となつて居て、それがこの場のおりゑの自害には大切な伏線である。

五行の稽古本も原版の丸本も同文である。おりゑの書置が眼目であるので、「書置の段」とも呼ばれる。

義士劇の系統については淨瑠璃名作集下卷の「假名手本忠臣藏」の解題御參照を乞ふ。

フシ〈納戸へ連れて入る。地弓矢は家掛はゆるりつと。マア〈〉内へは入りに傳へても今は仕へん君知らず。羽なき矢間重太郎羽織野袴大小も。昔に還る立派の骨柄。詞頼みませうと家來が案内。詞おりゑ誰やら見えたぞや。アイ地と何氣もなつかしい。夫の顔にはつとばかり。出て逢ひたさも面目涙フシ胸につかへの上り口。詞何をうち〈〉して居やる。どなたぢや是へ。ヤア重太郎か。母人先づは御健勝で。その挨をつけば。地喜内もにこ〈〉うちほゝ笑み。詞浪人の尾羽を枯らし。旅やつれも嘸ぞあらんと思ひの外。顔色もすこやか衣服の美々しさ。變らぬ體に先づは安堵。ハツア成程。その御案じも御尤も。拙者も方々とうろたへ。此儘に朽ち果てんかと存じたに。未だ武運盡きず宜しき主取りを仕り。御覽の如く身のまはりも主人より拜領。則ち旦那の御供いたし。鎌倉へ罷り下る。折か

ヘ。地弓矢は家掛はゆるりつと。マア〈〉内へは入りをつけば。地喜内もにこ〈〉うちほゝ笑み。詞浪人の尾羽を枯らし。旅やつれも嘸ぞあらんと思ひの外。顔色もすこやか衣服の美々しさ。變らぬ體に先づは安堵。ハツア成程。その御案じも御尤も。拙者も方々とうろたへ。此儘に朽ち果てんかと存じたに。未だ武運盡きず宜しき主取りを仕り。御覽の如く身のまはりも主人より拜領。則ち旦那の御供いたし。鎌倉へ罷り下る。折か

ら親人御病氣の樣子。承つて心なら惜しや行歩自由ならば。古主の御無念ず。立ちながらちよとお暇乞ひ。イヤを晴さんものと。牙を嚙んで日を送る。ナ＝女房。二親を預り長の月日。嘸ぞ 地 蹇に劣つた大腰拔け。對面も是ま其方も心遣ひ。過分々々と。 地 常に變で。女ならば密夫同然。身の穢れた犬らぬ夫の顏色。機嫌よいのも疵持つ足畜生。長居せば手討にすると。老の の。裏ではないかと。 スエ 案じ居る。怒りの一筋も。もし我が事を知つてか 地 喜内ゐざりし膝立直し。 詞 ムヽ奉公と。女房が胸も二つ玉 フシ はたと立て の口あつて。知行にあり付いたとな。切る一間の内。 地 思案を極め重太郎。 ヤイ重太郎。女は二人の夫を持たず。お暇申すと立上る。 詞 コレ待つてたも。 侍は二人の主に仕ゆるを。人非人と卑何ぼ親でも今の惡口。腹の立つは道理 しむ事。母の胎内を出づるより。腸に々々。浚義道なは日頃の氣質。そなたの有付きも孝行の爲ぢやもの。あゝ言 しみ込んである事わりや忘れたな。そはしつても底心に何の惡う思はしや の根性とは知らず。妻子を捨て親を捨てゝ再び家に歸らぬは天晴れ悴は武士ろ。何事も了簡召され。イヤサ拙者も なりと心の自慢。親の病氣の見舞に來急の御用。隙取らば主人へ不忠。罷り たさへ。不覺者と思ひしに。二君に仕歸るこの後は。最早お目にもかゝるま へてその腐つた魂の。大小をひけらかい。ハテ氣の短い。急ぎの用なら留め しに來たか此喜内はな。貧苦には迫つはせまい。がわりない無心があるわい ても。重代の具足は質にも入れず。口の。そなたが他國召さつた後は。何を 活計に世を渡らうあだてもなし。道具諸式も賣拂ひ。やう〳〵嫁女の賃仕事 や。乳呑子抱へて人に雇はれ。それは それは憂き艱難口で言ふ樣な事ぢやな い。喜内殿の病氣の上に孫が抱瘡。人 參と熊膽で。仕立てにやならぬ煩ひに。 地 常の藥の才覺さへ石で手詰めた貧の 病。旅の遺ひは有合ひとやら。親子の 中でも金銀の無心はどうやらいひにく けれどなう嫁女。 詞 アイ〳〵。よそ外 の事ではなし。主ぢやとて何の否がご さりませうと。 地 言ふを打消し。 詞 ハ テサテコリヤ何をいふ。最前御老人の 詞何と聞く。親子の緣はもう切れてあ るわい。尤も路銀は貯へたれども。主 人より頂戴の金子。一錢も貢ぐことな らぬ。嬉しや今日といふ今日厄介を拂 うて心がさつぱり。 地 義理もへちまも一本立ち。女房そちにも暇くれた。 詞

イヤサ驚くことはない。科の仔細をいひ聞かせば。却つて身が武士が立たぬ。他人に何にも聞く事ないと。地ちりはひ付かねば母親は。顏打眺め。詞是は又きつい思ひ切り。尤も父御へ不足はあらうが。嫁に何の科がある。さう言はずと機嫌直してどうぞ今日一日逗留してたも。嫁女留みやいの。氣の付かぬと。地様子白髮の氣を汲んで。涙かた手に夫の傍。水の出端へ茶の花香。そつと差出す追從も。身をねぢ向いて皺面顏。取付く島もないじやくり フシせん方。なさに稚兒を。抱いて出ても見たばかり。愛想なければ恨めしげに。詞コレ太市。父様が戻つてぢやわいの。オ、抱かれたかろ〳〵。なんぼ抱かれ度うても。父様は抱きやさしやんせぬ。侍の立たぬと言はしやんすも。成程無理とは思はねど。地腑甲斐ない女の手一つで。お宿老のお二人に御不自由な日がさしともなさ。色々さま〴〵に身を碎くは。詞大概お前も推量してくれたがよい。身に曇りがない言譯がしたうてもどうもならぬ。腹が立つなら堪忍して。地太市は可愛うないかいな。お前ばかり出世して子は飢ゑても構はずか。つらい貧苦を少しでも思ひやりがあるならば三つ四つの重ね着を一重は脱いで朝夕の。煙の代にとおつしやつてもさのみ惜しうもあるまいに。あんまりむごい愛想づかし。左程つれないお前でも此子が親と思へばこそ。毎晩熱の譫言にも。父様呼んでと泣くわいの。詞コレ胴慾な父御の傍へ往て。母が詫言してたもと。地押しやれば這ひおりて。父様なうと縋り付き。恩愛血筋の一聲は。名作の鋒に斬付けらるゝ如くにて。鐵石の様なる重太郎スエテ涙をこたへ兼ねけるが。氣を取直し突退けて。詞親の事さへ思はねば。まして悴が事何とも思はぬ。緣切つて了うたれば。蔦かぶらうが飢ゑうが。此方に構はぬこと。地くどう言ふなと睨めつくる。母は興覺め。詞コリヤ重太郎。さても〳〵今迄は又とない孝行者と思うたが。貧しい親を見限つて。一人榮華をする氣ぢやな。エ、見遂へた道知らず。浪人すれば其様に。さもしい心になるものか。望みの通り親子でない。勝手次第に出て行きをれ。地子と思はねば恨みはないが天道の御憎しみで身の行末が思はるゝ。エ、淺ましい人でなしと。煙管うち付け聲震はし。詞アノ畜生に構はずと。地嫁こちおぢやとばかりにて。フシ恨み泣く泣く立つて行く。地返答もせず表の方。出て行く袂を女房引きとめ。詞去られ

た夫を留めはせぬが。出て行く氣なら此子を連れて行かしやんせ。ヤア白痴者。去つたからは子でもないわい。イヤ〳〵〳〵。男の子は夫につく世間の大法。水仕奉公してなりと。お二人を養ふに此子があつては枷になる。せめて抱瘡子の介抱は親の不祥ぢやさしやんせと。地門へ突出しぴつしやりと。さすが氣强う言ひながら。戸の透間より差覗き。詞コレそれが迷惑なら。まに小柄。胸を極めて眼を閉ぢ。突つ込む鋒稚兒の只一聲に息絶ゆる。死骸と共にどうど坐し スエテ泣く聲。一度に父喜内。重太郎出かしたとわつとスエテばかりに咽せ返る。はつと驚き立上る。ヤレ待て暫しと戸を開き。詞古主の爲に親を捨て。現在の子を手にかくる。その丈夫な魂では敵師直を討損ずる事あらじ。オヽそれでこそ我が子なれ天晴れ忠臣 フシ出かしたり。地忠義の旅の

一度思案仕直して。立戻る氣はないか。地心强やとかつぱと伏し。聲もえ上げず忍び音の。心奥より父の聲。おりゐ〳〵と呼ぶ聲に。アイ〳〵。そこへと言ひながら。我が子に名殘り後髪せはし泣く間も姑が嫁女々々に是非なくもフシ思ひ切つてぞ奥へ行く。地さしも義强き重太郎も。我が子の枷に縛られて。行きも得やらず抱締めスエテ氣は暗

闇と。なりにけり。地折からすた〳〵せきに關内。詞餘り時刻が伸びますから大鷲様小寺様粟田口まで早や御立ち。拙者も御兩人の御供。不躾ながらお先へ參ると。地言捨てゝ引返す。南無三寶おくれしと朋輩の嘲り何とせんと。顚動散亂納戸口。病ひの床を這出づる父の喜内が探り足。隔てぬ仲の内と外。太市郎が肌押しくつろげ。口に稱名手

餞別せんと。懐中より金子取出し。詞コリヤ此金はな。主君御生害と聞くより。直ぐにかの地へ駈付けんと。旅の用意に貯へしが。計らず老病さし發り。空しく引つ込みありながら。地この年月の貧苦にて。たとへ飢ゑ死ぬるとも。忠義の金には手をかけまじと。女房嫁にも隱した路銀。フシ御用に立ちやれと投出せば。地重太郎飛びしさり。詞ハア、割符を合はす忠義は一體。拙者も爰に五十兩。この金は大星殿より配分の用金。私事には遣はれずと。母にも無情くもてなせしが。地父の心を籠められし其金子を申受け。肌身につくれば親人も。敵討の御供ぞや。詞また此金子は御老體へ。拙者が寸志の置土産。悴が追善佛果の爲。お頼み申し奉る。地扨も〳〵武士の義理程つらきものはなし。詞連判の侍小寺大鷲拙者な

んど。かの師直によしみある藥師寺が城中へ或は日傭乞食に身をやつし。鎌倉の樣子聞きつくろひ。大星殿へ日毎の內通親妻子にも語らじと。地誓紙の手前母人にも。包みし段は眞平御免。大事を抱へて故鄕へ歸る不覺者と最前の御意見肝に銘ぜし故。手にかけし悴は主君の追腹。未來の先陣よくしたな。追付け敵を討了せ直ぐ樣切腹仕り。冥途より吉左右を申し上げう。親父樣。オヽ必ず待つて居申すと。親子手に手を取組んで。思はず知らずはら〳〵とフシ嬉し涙の暇乞ひ。地障子の內にもわつと泣く。聲に惻り立退けば。詞なう重太郎。女房子にも隱す大事。母も出まいと思うたれど。おりゑが自害しやつたわいの。死顏に一目暇乞ひ。それ程の事は不忠にも。地わしやなるまいと思ひます。おむつ爰へと二人して。舁いて出でたる亡骸に。ホフシ書殘なる藻鹽草。地浮橋取り上げ涙ながらし。詞父樣母樣へ申し殘し〻〻。先立つの內通親妻子にも語らじと。地誓紙の手前母人にも。包みし段は眞平御免。大事を抱へて故鄕へ歸る不覺者と最前の御意見肝に銘ぜし故。手にかけし悴は主君の追腹。未來の先陣よくしたな。追付け敵を討了せ直ぐ樣切腹仕り。冥途より吉左右を申し上げう。親父樣。オヽ必ず待つて居申すと。親子手に手を取組んで。思はず知らずはら〳〵とフシ嬉し涙の暇乞ひ。地障子の內にもわつと泣く。聲に惻り立退けば。詞なう重太郎。女房子にも隱す大事。母も出まいと思うたれど。おりゑが自害しやつたわいの。死顏に一目暇乞ひ。それ程の事は不忠にも。地わしやなるまいと思ひます。おむつ爰へと二人し

いたし。恨みは晴れて此身の申譯立ちがたく。これもお二方おみつぎの爲。淺ましい立君の世渡り。ヤアそんなら親父殿の介病に賤しい辻君の勤めまでしやつたかいなう。往來の人に合力を受け。肌身は汚さずゆへ共。夫の疑ひを受け。是のみ迷ひの種になり〻〻わけて悲しきは太市郎。疱瘡もかせ口になり。悅ぶ甲斐もなき別れ。オヽ道理〻〻。生長ある子を殺して。なんの生きて居る心があらう〳〵オヽ〳〵可愛や〳〵。一つ今朝買うて歸りゆ田鰍の曲物。膳棚に御座ゆ。とゝ樣の榮の物にお上げなされ下されゆ。一つ裾の切れし私が袷坊が餘所行に縫ひかけ置ゆ

ちゆは不孝にゆへ共。夫の心底立聞きも一時も早う冥途の殿樣に夫の心底申し上ぐるを樂しみに相果てゆ。重太郎殿へは面目なさに。何事も書殘さずゆ。めでたくかしくの地終まで。夫に立つる眞實の又と類ひもない貞女を。一日安堵の思ひもなう。辻君とまで身をなして朽果てさせし可愛やと。空しき死骸に抱き付きフシ前後不覺に取亂す。地喜內涙を押拭ひ。主人の爲なれば こそ傾城となり非人となり。立君となる心遣ひ。斯程の忠臣重太郎を子に持つた此親父。我もちつとも悲しうない。死んでの跡のフシ名こそ惜しけれ。詞視うて目出たう別れの盃。お婆つぎやれと取上げて。奧齒もれくる謠聲。謠げに名を惜しむ弓取は誰もかくこそ

が。心がゝりにゆまゝ死骸に着せて御葬り頼み上げ〻〻。御介抱申す人もなく。御不自由の樣いかばかり悲しけれども一時も早う冥途の殿樣に夫の心底申し上ぐるを樂しみに相果てゆ。重太郎殿へは面目なさに。何事も書殘さずゆ。めでたくかしくの地終まで。夫に立つる眞實の又と類ひもない貞女を。一日安堵の思ひもなう。辻君とまで身をなして朽果てさせし可愛やと。空しき死骸に抱き付きフシ前後不覺に取亂す。地喜內涙を押拭ひ。主人の爲なれば こそ傾城となり非人となり。立君となる心遣ひ。斯程の忠臣重太郎を子に持つた此親父。我もちつとも悲しうない。死んでの跡のフシ名こそ惜しけれ。詞視うて目出たう別れの盃。お婆つぎやれと取上げて。奧齒もれくる謠聲。謠げに名を惜しむ弓取は誰もかくこそ

あるべけれ。ナホス地ヤあらやさしの我が子や健氣やと。泣かぬ顏する父親の。にこ〳〵顏も此世の名殘。ハア、仰せにや及ぶべき。詞我子の絆しを切つたれば。心の鐵石十倍增し。主君の敵の其上に。妻の敵。子の敵。一時に討つ

門出と。思へば心に勇みあり。地たとへ天地をかけるとも。念力通つて師直が。首提げんは瞬く內フシ早やおさらばと。立上る。詞もうお往きやるか。やがて目出たう吉左右々々々。地その吉左右とはいとし子が。命を捨てに行く旅路冥途の案內は嫁と孫三途の川を急ぐらん。可愛と見やる野邊送り。フシ今朝は祝ひし。神送り。門に捨てたる猩々も。涙の種の笑ひ顏しをれ。勇んで三位へ出でて行く